

研究主題

高等学校における 特別支援教育の充実に関する研究

—校内研修プログラムの作成及び各校のニーズに応じた活用を通して—

【研究担当者】 金 田 美輝子 外 館 悌
田 代 由 希 平 浩 一

【この研究に対する問い合わせ先】

Tel 0198-27-2821 FAX 0198-27-3562

E-mail sien-r@center.iwate-ed.jp

I 研究の構想

現状と課題

高等学校の特別支援教育については、平成 18 年に学校教育法が改正され、高等学校も含めた全ての学校において、特別な支援を必要とする児童生徒に対し、障がいによる困難を克服するための教育を行うことが明記されました。その後、「発達障害支援モデル事業」が進められ、複数の指定校における実践の成果や課題が示されています。こうした中、中央審議会答申(2018)において、インクルーシブ教育システムの構築を目指し、一人一人の子供の状態に応じた、組織的・継続的な支

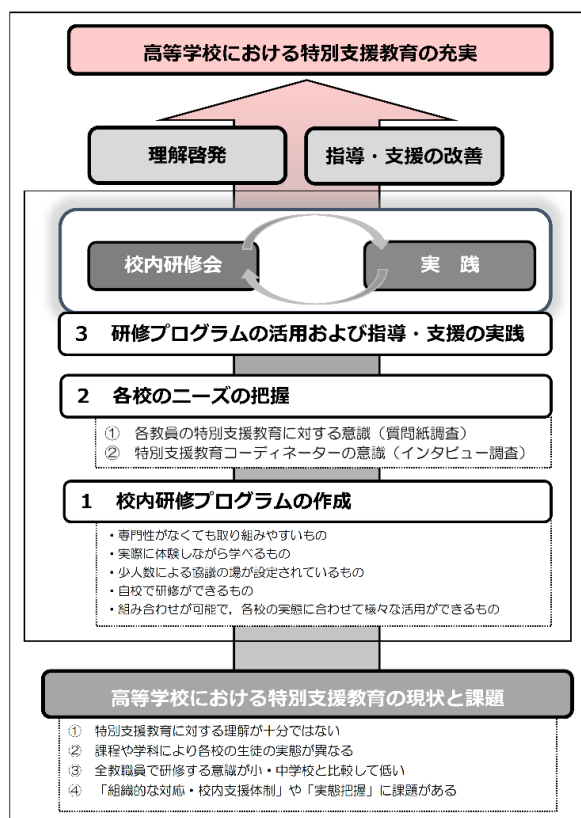
H18「学校教育法改正」により明記

高等学校も含めた全ての学校において、障がいによる困難を克服するための教育を行うこと

インクルーシブ教育システムの構築を目指す

一人一人の子供の状態に応じた
組織的・継続的な指導が求められている

教職員の意識や専門性の向上
組織的な支援体制づくりの必要性



【研究構想図】

援の必要性が述べられており、そのための教職員の意識や専門性の向上や、組織的な支援体制づくりが早急に求められていると言えます。

高等学校の特別支援教育の現状と課題については、これまでの研究から 4 点が明らかとなっています(左【研究構想図】参照)。これらの課題を踏まえ、「高等学校における特別支援教育の充実」に向けて、手立てを左の 3 点にして研究を進めていくこととしました。

研究の手立て

1 点目の「校内研修プログラムの作成」に当たっては、専門性がなくても取り組めるものであることや、自校で研修できるものであることなどの点に留意して作成することとしました。

2 点目の「各校のニーズの把握」については、各校の教員と特別支援教育コーディネーターから、それぞれ調査を実施することとしました。

3 点目の「研修プログラムの活用および指導・支援の実践」については、作成したプログラムを活用した研修会を実施して、指導・支援の実践につなげていくこととしました。各校のニーズを把握した上で、研修内容を特別支援教育コーディネーターと検討し、9～11月に研修会と指導・支援の実践を行いました。

II 実践

詳しい研究内容やプログラムの内容をご覧になりたい方は下記からご覧下さい。本研究の「研究報告書」と「校内研修プログラム集」がアップされています。http://www1.iwate-ed.jp/kankou/kkenkyu/174cd/h30ken.html

A校 全日制／普通科・専門学科／全12学級

- ・教員は、支援が必要と思われる生徒の割合は多くないと捉えている（ほとんどの教員は「20%以下」という捉え）
- ・学校規模が大きく、全体での研修会実施が難しい
- ・授業における全体への支援は実施されている
- ・「知識」と「実践」をつなぐための研修必要（特別支援教育 Co.）
- ・「体制づくり」「支援会議定期開催」が課題（特別支援教育 Co.）

- 6月 校内研修会①講義「支援を必要とする生徒の理解と支援」
9月 学年研修会②「事例検討会」
11月 学年研修会③「個別の指導計画の活用」

B校 全日制／普通科／全6学級

- ・教員は、学習面、行動面ともに支援を必要とする生徒の割合が多いと捉えている（「20%以上」いるが約半数）
- ・授業では個別の対応も行っているが、特性に応じた対応はできていないと考えている教員も4割いる
- ・生徒理解を深めながら支援を考える力が必要（特別支援教育 Co.）
- ・中高連携の授業公開予定

- 9月 校内研修会①「事例検討会（見立て、指導、支援）」
10月 校内研修会②「授業づくり（指導・支援）」
10月 校内研修会③「事前研究会」
11月 校内研修会④「事後研究会」

C校 定時制／普通科／全3学級

- ・教員は、学習面で支援を必要とする生徒の割合が多いと捉えている
- ・生徒の卒業後の進路に向けた指導・支援が必要（特別支援教育 Co.）
- ・教員が学びたいこと「就労・進学を見通した支援の在り方」
- ・支援の必要な生徒への対応は、教員間の協力した対応ができてい一方で、生徒の特性に応じた対応はできていないと捉えている教員もいる

- 9月 校内研修会①講義「支援を必要とする生徒の理解と支援」
9月 校内研修会②「事例検討会」
11月 校内研修会③「個別の指導計画の作成」

現状とニーズ・研修計画

実践①

インシデント・プロセス法を用いた事例検討会を行いました。担任が困っていることを報告し、質問やもっている情報を共有し合っ、対象生徒の課題とその支援について共通理解を図りました。

提出物を出さない状況が続いていて学習の取組に消極さが見られます

提出物の状況として傾向は？
国語の苦手意識の状況は？
課題以外の提出物の状況は？
私物の管理や整理にかかわる情報は？

①提出物について 課題提出日の分散化
②コミュニケーションの能力の醸成 メモの習慣を支援
③私物の整理 個別に話を聞く機会の設定
④自己肯定感の醸成 ファイリングの仕方の練習
得意な活動の評価

対象生徒に
関わる
結果
確認
された
課題は、
これ
です。

生徒の問題となっている「行動」の機能を考えることにより、その行動が維持されている要因を分析し、支援の方法を考える「機能分析」に取り組みました。学年ごとに対象生徒を決めて検討しました。

問題となる行動	行動に対するアクション	結果事象（観察の様子）
姿勢が悪い	個別の声かけ 「10分でも良いので正そう」 「今は何をする時間かな？」 「一緒に頑張ろう」と意欲を喚起 「先生が一生懸命教えているのにその姿勢で良いの？」 マンツーマン指導 全体中での個別指導	最初は効果的だったが、次第に薄れた 反応あり 起き上がった 反応あり 反応あり 反応鈍い
課題に取り組まない（授業参加）	個別の声かけ 「ここがセントだよ」	すぐ取り組み始める
遅刻	個別指導 「遅れてきたけど、理由があるんだよ」	素直な態度が見られる 理由を話す
態度	個別指導	以前と比べると反動的でない 成績と関係があるかも
成績	個別指導	「次（後期）は、ちゃんとやります」
*その他の変化…以前と比べ、反動的な様子が見られなくなった。昨年より欠席が減っている。		

機能分析
を使って、
学年ごと
のグル
ープで、
問題とな
る行動に
対する支
援を検討
した結果
と、その
後の生徒
の様子を
まとめた
資料です。

実態把握のための「Scale C³」を用いた事例検討会です。対象生徒の困難さと強みを整理するために、各教員が付箋に具体的に書き出して、下記の表に貼り付け、困難さの共通理解を図り支援を検討しました。

3 実態把握と支援の検討 90分

心と体の状態、不注意、多動性、こだわり、自己肯定感

この表から、困難さがこの欄に集中しており、「不注意」を要因とするものである可能性が見えてきました。

実践②

始めに、特別支援教育 Co. が作成した個別の指導計画を共有しました。前回確認した支援を行った結果が担任から報告され、関わった教員からの情報も加わり、対象生徒や保護者の変容が確認されました。

5 個別の指導計画の活用 30分

★(月) 数学、(木) 国語、(金) 英語
★校内で帰宅前に実施

①課題提出状況は改善されている
②思いの外、感じていること等語ってくれた

一度だけ数学の予習してきた
「家でやってきなさい」ではなく、曜日分散化させ、校内でやることでやり遂げることに繋がっている

保護者に意図を説明したところ、「学校でそこまでやってくれとは思わなかった。この学校に入学させてよかった」と涙ぐんだ

課題の提出
を決定
したこと
と、校内
で取り
組む時
間

中高連携の授業公開に向けて、授業づくりのための研修会を行いました。モデルとなる小学校と高等学校の授業をDVDで視聴し、その中から工夫点を見付け、自分の目指す授業を確認しました。

10 授業づくり(指導・支援) 50分

目指す授業は？ 全員参加する、全員思考する

わかりやすい、生徒の活動を多く入れる
「ユニバーサルデザインの授業」視聴

すぐに忘れる 集中力続かず

困り感を改善するための授業とは？
具体物や写真の活用 身近な例の提示
個のレベルに合わせた問題設定
振り返りの場の設定

授業の
実際を
観ること
で、どの
ような
イメージ
が湧いた
のか、具
体的にイ
メージ

個別の指導計画を作成するため、前回の内容を受けて、指導・支援の実践の結果について報告し合いました。その結果、下記のような支援と生徒の反応が共有され、対象生徒の新たな課題も明らかになりました。

4-1 個別の指導計画の作成 40分

○指示を聞かない・内容が理解できない

移動の際「始まるよ」と声をかけ一緒に移動したら、開始に間に合った
書く範囲を短く区切り、机間巡視をしたら、ノートに書くことができた
授業で取り上げた項目や用語について本人に確認をしたら、うなずいたり「分からない」という反応が表れた

新たな課題
○板書を写すのが苦手
○自分から意思表示ができない
○登校しない日が続く

各自の
やるべき
ことが
明確な
状態に
なっ
て、活
発な交
流がな
されて
いた。

成果と課題

- ◎今後の支援の見通しと各教員のすべきことが明確になった
- ◎対象生徒の変容を確認しながら教員間で支援の効果を実感できた
- ▲進行をサポートするための資料が必要
- ▲進行に関わって協議内容の焦点化と流れのポイントの明示が必要

- ◎行動の背景を探りながら望ましい行動を考える道筋を体験できた
- ◎モデルとなる授業から、自分の目指す授業のイメージをもてた
- ▲確認した手立てが効果的ではなかった場面で支援が行き詰まった
- ▲教員のニーズを踏まえた上でモデルとする授業内容の検討が必要

- ◎観点に基づいて整理したことにより、詳細な実態把握ができた
- ◎実態に即して新たな課題を見付け、指導・支援を検討できた
- ▲「Scale C³」の理解を深める必要がある
- ▲協議の際の視点やポイントの明示が必要

Ⅲ 結果と考察

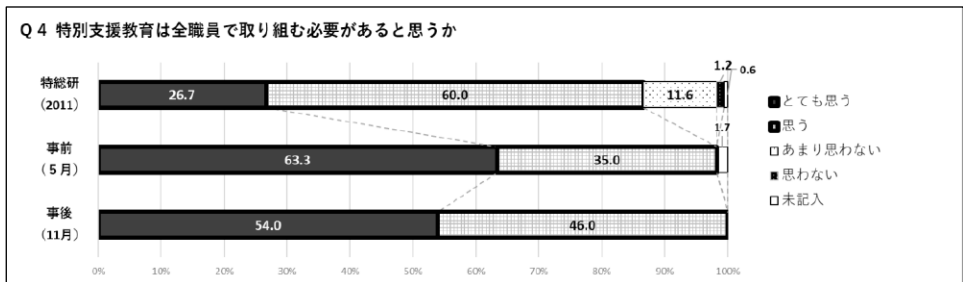
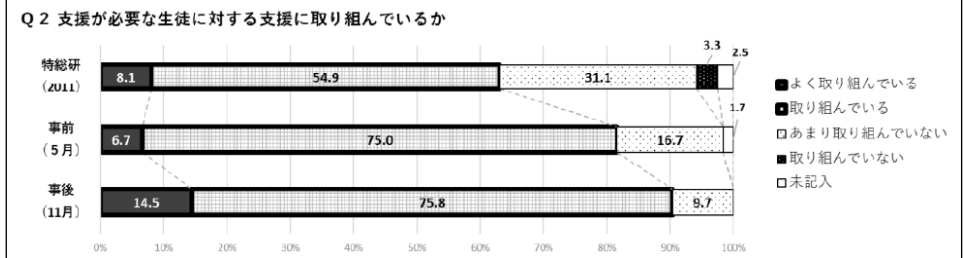
結果

研究協力校3校の実践前の5月と実践後の11月に、教員の特別支援教育に対する意識及び行動の変容を確認する質問紙調査を実施しました。

t検定による比較からは、「特別支援教育に対する研修会を実施すること」の項目についてのみ、有意差が認められ、他の項目については認められませんでした。

また、回答となる4つの選択肢を肯定的回答と否定的回答の2つに分け、肯定的割合の変化を実践前後で比較したところ、40項目中10項目で増加しました。特に、「支援が必要な生徒に対する支援に取り組んでいるか」の項目では、5月の時点で先行研究による調査から約18.7%増え、

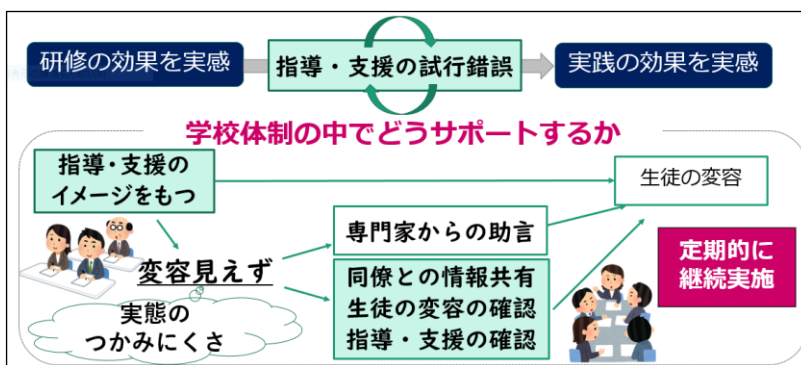
実践前後では更に8.6%増加しました。「特別支援教育は全職員で取り組む必要があると思うか」については、実践後に肯定的回答の割合が100%となりました。



考察

本研究では、研修前後で意識の変化は認められましたが、5月と11月の指導・支援の実践前後での意識には変化が認められませんでした。このことについては、いくつかの要因が考えられますが、その中の1つとして、取組期間の短さが影響している可能性があると考えます。研究協力校3校それぞれの実践を整理すると、次のことが見えてきました。

各教員が「研修の効果を実感」してから「実践の効果を実感」するまでには、「指導・支援を試行錯誤



する段階」があり、その「指導・支援を試行錯誤する段階」を学校体制の中で、どのようにサポートしていくかという点が重要であると考えられます。教員が「指導・支援のイメージ」をもってから実践に臨み、生徒の変容が見えないときに、専門家からの助言を受ける機会や、同僚との情報共有の場を設定することが必要であり、研修会や支援会議を定期的実施し

ていくことが必須であると考えます。

Ⅳ 研究のまとめ

成果と課題

本研究における成果 (◎) と課題 (▲) の一部について示します。今後、更に課題となった点について検討していく必要があると考えます。

- ◎校内研修プログラムを作成することにより、特別支援教育を進める過程のPDCAサイクルを示すことができた
- ◎講義形式の研修会ではなく、自分たちで情報を出し合って支援を検討する過程を体験したことにより、実態把握及び指導・支援の考え方が分かり、他の生徒への応用も可能になった
- ▲教員が指導・支援の効果を実感するための工夫
- ▲特別支援教育コーディネーターが研修会を進めやすくするための工夫